ベルマーク活用 わが社は 協賛会社に聞く

三井製糖

ベルマーク運動の協賛会社へのインタビューシリーズ「私の会社とベルマーク」。13回目は三井製糖株式会社です。同社はベルマーク運動初期の1962（昭和37）年から協賛会社として協力していただいています。シュガービジネス統括本部シュガービジネス推進部商品戦略課の山﨑貴子さん（課長）と平手実香さんにお話を伺いました。
（聞き手・白井重和、和田直子、写真・朝日教之）

「誰かの役に立ちたい」

――長い間、看板商品のひとつであるスプーン印の砂糖にベルマークをつけていただき、ありがとうございます。御社が協賛された経緯やベルマーク運動との関わりについて教えて下さい。

三井製糖の前身となる大阪製糖が、ベルマーク運動に共感してスプーン印の砂糖に「はと印」（はとがベルを持っている当時のデザイン）をつけたというのが当時の社内報に掲載されています。その後、合併など様々な変化がありましたが、「ベルマークのお砂糖」として広く認知されていることから継続してきました。

山﨑さん（左）と平手さん

社員にとっては、入社時からある当たり前の存在かもしれませんが、会議などでマーク収集の経験談が話題になることもあり、日本人に根付いた活動だと実感します。

もし弊社が協賛会社でなかった場合、多くの方たちに「スプーン印」を認知していただく活動として他に何が出来たかと考えると、本当に難しいことだと思います。

――ベルマークをつけている効果を感じることはありますか？

直接ベルマークの活動を見たいとの思いから、子どもが小学1年生の時から2年間ベルマーク委員をしました（山﨑さん）。他のお母様方から「スプーン印はベルマークだね」という声をよく聞き、切り離せない存在になっていると実感します。他社と差別化がしにくい砂糖で、そのように覚えていただくことはかけがえのない財産です。

また、合併前には、同じスプーン印のパッケージでもベルマークの付いている商品と付いていない商品があるという時期がありました。「スプーン印のお砂糖を買ったのに、ベルマークがついていない」というお問い合わせをよくいただき、当時から結びついたイメージとして頭に入れていただいているのだと感じます。

お客様の声として「ベルマークを切る時に、砂糖がじゃりじゃりする」「静電気でくっつくがどうすれば？」などの声をいただきますが、実際に作業をして実感しました。細かく大変な労力をかけて行う作業ですが、ベルマークが学校の備品や教材に変わり、子どもたちのためになっている、誰かの役に立てるという達成感があるからこそ50年以上も続いてきているのだと思います。

「人のために何かしたい」という気持ちは皆持っていますが、震災時など簡単に駆けつけられないPTAにとって、被災地まで届かなくても、こういうちょっとした活動が子どもたちのためになるというのは大切なことです。

おなじみ、ベルマーク付き代表商品

――お二人の仕事はどんな内容ですか？

商品の表示変更や、スティックシュガーや角砂糖などの加工糖の窓口になっています。マーケティング調査をもとに、新商品のもとになる設計やコンセプト作り、新商品のプロモーションを行います。

――毎年5、6月に開催するベルマーク運動説明会もぜひご活用ください。

ベルマーク委員をしている時に、他の委員さんに行ってもらったことがあります。活動方法のヒントになるだけでなく、商品情報や協賛会社の加入脱退など、ベルマーク便りに書きたい内容を知ることができる良い機会だと思いました。

スプーン印 強み生かし

――今回、収集箱プレゼントキャンペーンを行っていますが、ベルマーク委員をされたご経験も今回のキャンペーンに生かされていますか？

「スプーン印＝ベルマーク」までは繋がっているので、それを生かして砂糖のよさをお客様に再認知していただきたいと考えました。砂糖のヘビーユーザーは年齢層の高い女性に多いのですが、現在、市販のつゆなど複合調味料の売り上げが伸びており、砂糖へのネガティブな声もあるため、砂糖そのものを使用し和食を作るという認識が若いお母さん方に薄れてしまうのではと危機感を抱きました。

そこで幼稚園や小学生の子どもを持ち、子どもたちの健康を考えてご飯を作る世代にアプローチしたいと思った時に、ベルマークは有効なツールになってくれると考えました。収集箱という目に触れるものを学校においてもらえたら、子どもたちに対してもビジュアル面でアピールでき、砂糖への理解を深めるスタート地点になるのではと思います。

また、社内でもそのような意義深い活動に参加しているという意識をもう一度持てるように、まず第一歩としてこの収集箱で感触を見たいと思います。

今回、ベルマーク財団に相談した時から、他社の活動や募集方法、チラシの配布についてのアドバイスをいただき助かりました。スプーン印のパッケージを前面に出しているので、申し込みがくるかどうか心配でしたが、「かわいいから申し込みました」というコメントもいただき、安心しています。

――白砂糖が体にあまり良くないという話はかなり広がっているのですか？

はい。根拠はありませんが、色付きの方が体に良いという認識をされているようです。上白糖は無色透明な結晶が光の乱反射により白く見えているものなのですが、昭和時代には漂白しているのではないかという風評が広まりました。誤解のない状態で使ってほしいと思い、活動しています。

若いお母さんをターゲットにすると同時に、子どもたちへの食育にも力をいれており、高校生を対象とした「SPOON LAB」という出前教室や、小学生の「パティシエ選手権」への協賛などを行っています。

料理研究家のコウケンテツさんが講師の親子クッキング教室では、親子一緒に、砂糖の旨みやコク、焦げ目など甘さ以外を楽しみながら知っていただく機会にもなっています。また、最近もイベントで「砂糖の食べ比べ」を行いました。色や粒の違いで味も異なるということや、適量を食べればおいしくて体にも必要なものだということを、体験を通じてアピールしていければと思います。

2月29日まで応募受け付け中

被災地でイベント継続

――御社はCSR活動にも力を入れています。

自分たちの利益だけでなく、環境、社員、取り巻くものすべてのために活動するという考え方を「SPOON HOUSE」という家に見立てて活動しています。

東日本大震災では、社員が土日にボランティアで被災地に行き、地元スーパーでお祭りを行うというイベントを2012年から継続しています。コウケンテツさんもボランティアで参加され、クッキングショーでスープを作って配るなど来場者の方々に楽しんでもらいました。小さなイベントですが、毎年続けていくことが大切だと考えています。

また、東北の味覚が当たる「Sweet Smile東北」キャンペーンも2011年から行っています。先日、商品を提供して下さっている南相馬市のお菓子屋さんに当選者リストを届けに行ったところ、「やっと5年ですね。あと少しで店舗を震災前の状態に戻せます」とおっしゃっていました。被災地の方々は日々向かい合っているのだと思うと言葉が出ませんでした。

――ベルマーク財団へのご要望やベルマーク運動に期待することがありましたら、教えてください。

子どもの数が減るなか、集票点数が年5億点を超えるという話を聞くと、続けていく意義があると感じます。企業と社会とをつなぐ活動としても定着していると思うので、弊社も継続していきたいです。

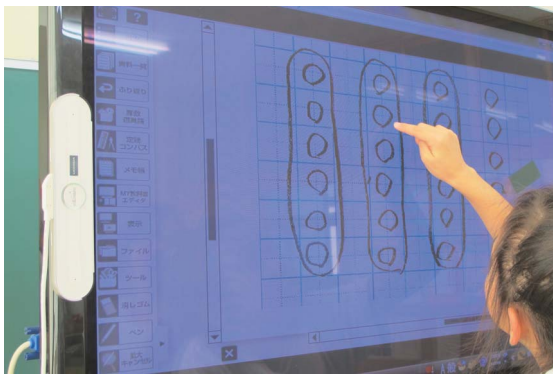
長年同じ商品にマークをつけてきましたが、会社のCSR活動の大きな核になっているということを改めて見直し、今後、他の商品につけることも検討していきたいと考えています。

備品援助「助かってます」

栃木・足尾小 算数、音楽、修学旅行に活躍

渡良瀬（わたらせ）渓谷を群馬県側からさかのぼり、栃木県に入ったところが足尾地区です。合併によって今は日光市になりました。そこにある市立足尾小学校（福田宜男校長、児童50人）を10月19日に訪ねました。ベルマーク財団が2015年度に学校備品を援助したへき地学校100校のうちの1校です。備品は子どもたちの授業に大活躍し、福田校長は「たいへん助かっています」と感謝していました。

モニターに電子黒板のユニット（左側の白い部品）を付け、図を自由に描いて、算数の授業もわかりやすく



「子どもたちにとって必要なもの」「持っているがまだ足りないもの」。援助してもらう備品を決める際に考えたことです。選んだのが、電子黒板とビデオカメラ、デジタルカメラでした。

2年生の算数の授業を見せてもらいました。受像機に「ユニット」という電子黒板の部品を付けています。「1はここに、おかしが6こずつ入っています。4はこでは、おかしは何ここになりますか」。児童が画面にある絵を指でたどりながら解いていきます。

デジタル教科書を写して、タッチペンで文字を書き込んだり、図形をわかりやすく説明したりします。拡大もできます。視覚的に教えられるため、先生の指導力が上がり、児童も意欲的になるそうです。

5年生の音楽の授業では、ビデオカメラが回っていました。担任がどう指導しているか、学んでいる児童の表情はどうか……。授業の実践研究にも使えます。

6年生12人は10月、鎌倉・横浜への修学旅行に行って来ました。1班6人の2班にそれぞれデジカメを渡し、思い出づくりに役立ちました。

（小菅幸一）

努力積み重ね 時代に応じて工夫

三重の小俣小 県内一 1200万点

三重県伊勢市の市立小俣（おばた）小学校（森本明宏校長、732人）のベルマーク集票点数が、1963（昭和38）年の運動参加以来の累計で1200万点を突破しました。県内トップで、全国で11番目、小学校に限ると9番目です。PTAと児童会が両輪で活動しており、地域の人たちも支援を続け、大きな成果を挙げました。

ベルマーク活動の中心は、PTAの「教育設備委員会」（林久美子委員長、53人）と、児童会の「ベルマーク委員会」です。この両者を担当の先生や地域の人たちがしっかりと支えています。

年度初めに、1年生の全保護者を対象に、奉仕活動としてベルマークの仕分けや点数計算を体験してもらいます。ベルマーク運動の意義と仕組みを理解し、今後の活動に生かしてもらうことにしています。このため、ベルマーク運動に対する保護者の「意識」が高くなっています。

ベルマークの回収は児童の家庭だけにとどまらず、地域の人たちにも協力を仰いでいます。市役所支所や郵便局、図書館、福祉会館、老人ホーム、スーパー店舗、生協など多くの施設に回収箱を設置しています。設置場所に掲示する協力呼びかけのポスターは、児童のベルマーク委員たちが制作しています。

さらに、2014年度から校区外の伊勢市立伊勢図書館にも同小の回収箱が設置されました。

ベルマーク預金で、卓球台やボール、ラジカセ、DVDプレーヤーなど、たくさんの教育備品を購入してきました。

現委員長は翌年には副委員長を務め、経験を生かして新委員長をサポートする流れになっています。これが教育設備委員会の活動力の強さの「源」になっています。

林さんと副委員長（前年度委員長）の深田一郎さんは「一朝一夕で達成できるものではなく、少しずつの努力の積み重ねが私たちの学校の『伝統』だと思います。古いシステムをかたくなに守ってコピーし続けるのではなく、時代に応じて運動のやり方を工夫しながら進めていきたいですね」と話します。

同小は1873（明治6）年の創立です。児童数は伊勢地方で最多です。1973（昭和48）年に完成した校舎は廊下が長いのが特徴で、直線で135メートルもあります。実際には走りませんが、「廊下で百メートル走ができる」と評判です。

（峰正明）

ベルカレンダーどうぞ

「ベルマークカレンダー」の2016年版が完成しました。財団ホームページからダウンロードしてご自由にお使いください。

応援ありがとう 被災校からメッセージ

ありがとうございました

2年生の体育の授業で、いただいたアジャスタブルハードルを活用させていただきました。ジャンプしたりくぐったり、高さを変えることができるので、低学年でも楽しく活動することができました。

その他に頂いた物も体育の学習やクラブ活動などで活用させていただきます。ありがとうございました。

▲宮城・亘理町立長瀞小学校

ベルマーク教育助成財団　様

日ましに寒気がつのりますが、貴団におかれましては益々ご健勝のこととご推察申し上げます。

先日は、浪江中学校に対し、震災被災校支援を賜り誠に有り難うございました。東日本大震災後の原発事故のため避難し、そして8月に学校を再開してから4年以上経過しています。しかし、前の校舎にあった全ての教材・教具を運び出すことができず、不足しているところでしたので大変助かりました。感謝申し上げます。

今後は生徒が充実した教育活動が送ることができるように、教職員一同いただいた教材・教具をおおいに活用していきたいと思います

以上、大変簡単ではございますが、御礼に替えさせて頂きます。ありがとうございました。

平成27年12月7日

福島県双葉郡浪江町立浪江中学校長　笠井　淳一
℡　0243－46－2301

▲福島・浪江町立浪江中学校

ベルマーク版オーサー・ビジット

あさのあつこさん 愛知・豊橋市立旭小

「ベルマーク版オーサー・ビジット」で10月26日、愛知県豊橋市の市立旭小学校（鳥居孝三校長、164人）に訪れたのは、青春野球小説「バッテリー」などの作品で知られる作家のあさのあつこさんです。臨時教諭の経験もあるあさのさんは、優しいまなざしで児童たちに語りかけ、想像力を引き出す手法で物語をつくる基本を教えました。児童たちは目を輝かせて取り組み、笑顔と笑い声が絶えない授業となりました。

特別授業を受けたのは6年の25人です。あさのさんから事前に「わたしのペット」という宿題が出されていました。こんなペットがいたらいいなと、架空の生き物やロボットを色紙に色鉛筆で描き、特別授業に提出することになっていました。

児童たちは、羽根の生えた猫や水かきのある犬、下半身が人魚になった馬、カラフルな甲羅をした亀など、ユニークな生き物を描きました。

あさのさんが、それぞれのペットの▽名前▽長さ（大きさ）▽特徴▽食べ物を尋ね、児童たちが班ごとに壇上で発表しました。さらに、▽ペットにどこで出会ったか▽その時にどんな会話をしたか（人間の言葉でなくてもいい）と尋ねました。

児童たちは、楽しそうに考えて、ノートに記していきました。

それは……思ったことを言葉にしてしゃべることができる猫の「たまちゃん」、その人の体調に合わせてイスやベッドなどになる「れい君」（ゆうれいの略）、困った時に駆けつけてくれる筋肉マンのような人間「エドワード」、災害時に活躍できる羽根のついた屈強なキャタピラー「ウィング・ザ・ガピー」、ほうきに乗って空を飛べる「よう子」（妖精の子どもの意）などです。

奇抜な名前や特徴、出会いの様子、ペットと話したことなどが次々と発表されました。

90分の授業はあっという間。時間があれば、回答をつなげて小さな物語を書いてもらう予定でしたが、児童たちの頭の中には、素晴らしいストーリーがそれぞれ出来上がっているようでした。

特別授業をしてもらうために熱烈なメッセージを作って応募した三浦雄一郎君と奈良田悠喜君は、あさのさんの作品の愛読者です。「自分たちの発想をそのまま受け入れてくれて、想像力を大切にしてくれる先生。とても楽しい授業でした。より一層、あさのさんのファンになりました」とうれしそうに話していました。

（峰正明）

想像力広げてストーリー

尾木直樹さん 茨城・日立市立坂本中

子どもたちに人気の本の作者（オーサー）が、学校を訪問（ビジット）して、とっておきの特別授業をする「ベルマーク版オーサー・ビジット」が12月17日、茨城県日立市の市立坂本中学校（澤昌明校長、238人）で開かれました。

訪れたのは、「尾木ママ」のニックネームでテレビでもおなじみの教育評論家・尾木直樹さん。トレードマークのおネエ言葉で、体育館に集まった全校生徒の緊張感を一気に解きほぐします。お話は、いじめの問題から、インターネットのLINEとの付き合い方、思春期の大切さ、さらにはテレビ・芸能界の裏話まで縦横無尽。PTAの方々120人も詰めかけた体育館は、笑い声と、真剣な眼差し、うなずく顔にあふれました。

坂本中は4年前から「IBI（いじめ撲滅委員会）」という活動に取り組んでいます。当時の1年生が上級生に心無い一言を言われたのがきっかけでした。1年生から始まった活動は全校に広がり、「いじめゼロ！一人一人をクリーンな心にしよう！」をスローガンに、定例会議、あいさつ運動、IBI新聞発行、IBIフェスティバルなど様々な取り組みを行っています。今年はついに生徒会の正式な委員会になりました。

尾木さんは、授業のために事前に生徒たちにいじめに関するアンケートを取りました。「IBIを応援する子は結構いるけど、実際に活動してる人は意外に少ないね」「否定的な少数意見もあるけど、それはなぜ？って考えることがとても大事なのよ」。アンケートの分析から話はだんだんいじめの核心に入っていきます。「一番深刻なのはねぇ、無自覚ないじめなの」。

自ら調査にもあたった、中学生のいじめによる自殺事件などを例にとりながら、「いじめた本人も両親も、遊びだと思っていた。自覚がないから反省もできない。相手の痛みを感じる感性の問題なんです」と、言葉に力を込めます。

では、その感性を養うにはどうすればいいのでしょうか。尾木さんは坂本中が取り組んでいる「KKS（くつのかかとをそろえよう）」運動を引き合いに出しました。「靴をそろえる。そんな普段の小さな仕草が相手との心を通わせる文化になり、その人の人柄になります。そのレベルが上がっていけば、努力しなくてもいじめはなくなります。心を耕すためには日ごろの小さな心がけが大事なんです」

この日の授業は生徒たちの心にもしっかり残ったようです。

（今村修）

無自覚ないじめ、深刻なの